

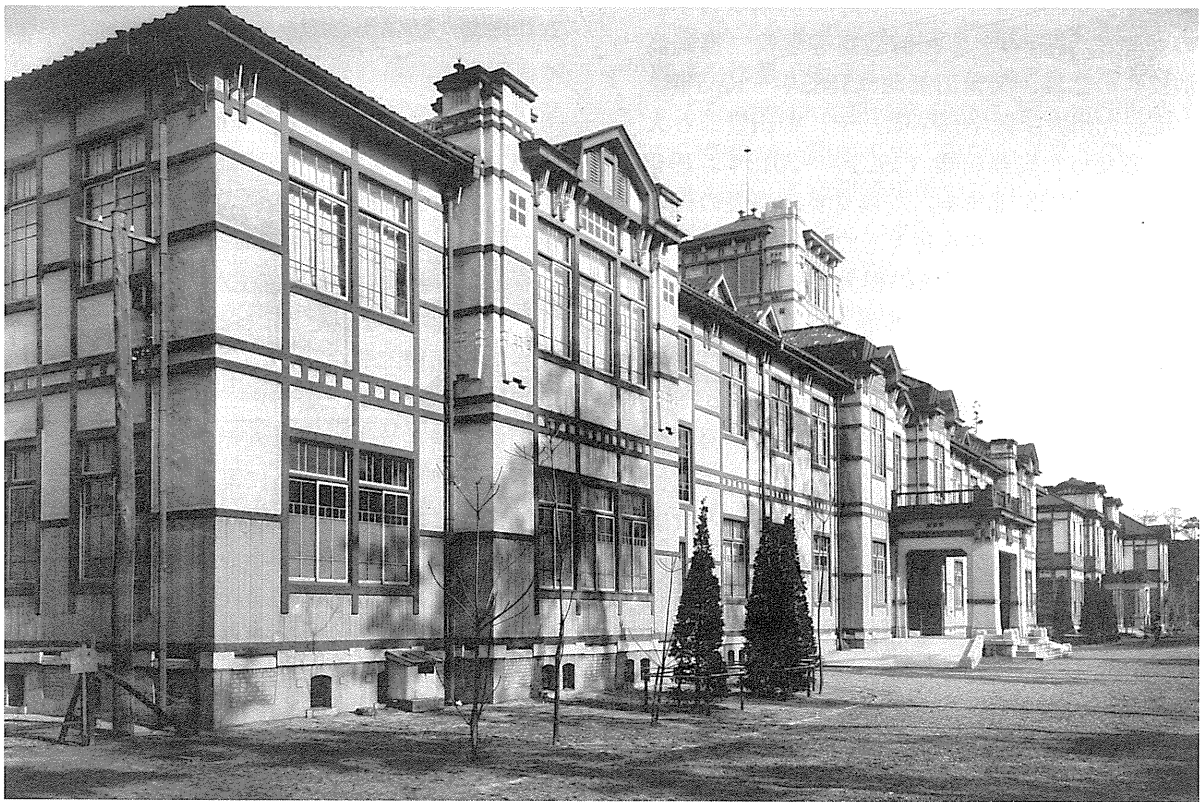
# 九州大学 大学文書館ニュース

第42号

2019. 3. 31

## 目 次

曾田豊二文庫の開設にあたって…………… 2	九州大学大学文書館委員会名簿…………… 7
福岡共同公文書館について…………… 5	九州大学大学文書館名簿…………… 7
	大学文書館日誌抄録…………… 8



「九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室」（1920年）

大正9（1920）年3月、医学部の正門を入って左手奥に耳鼻咽喉科学教室1018坪が竣工した。正面棟は2階建てで1階は右側が男子患者控室、左側が女子患者控室。男女別々の待合室は珍しいという。そのほか1階には実験室、診察室、看護婦室等が置かれ、2階には教授室を始めとする教官室、図書閲覧室等が、3階には宿直室、4階には物置があった。病室は本教室の背面に建てられた平屋に設置されていた（以上、『九州大学医学部建築史』2010年7月）。この教室を最初に主宰したのは、我が国のみならず世界の耳鼻咽喉科学界をリードした久保猪之吉である。久保教授の門からは20余名の教授や、多くの臨床家が輩出した。次頁以下にふれる曾田豊二の父、曾田恭助もその一人であり、久保らが発行した雑誌『エニグマ』の編集や、福岡市・北九州地域における文化活動の一翼を担い、また支援した人物としても著名である。

## 曾田豊二文庫の開設にあたって

安藤文英

[解説] 以下は2019（平成31）年1月14日、医療法人西福岡病院（福岡市西区生の松原）の隣接地に設立された「曾田豊二文庫」開設式典における安藤文英理事長（1975年、九州大学医学部卒業）の「ご挨拶」である。曾田文庫は九州大学医学部を卒業後、同大助教授を経て福岡大学医学部教授（耳鼻咽喉科学初代教授）に就任、福岡大学病院長等を務めた曾田豊二（1925年～2017年）の蔵書約3万冊のコレクションであるが、同文庫開館式典での「ご挨拶」には、曾田豊二の経歴や活動だけでなく、曾田が連なる九州大学耳鼻咽喉科学教室の歴史、曾田の学んだ旧制高等学校（福岡高等学校）の意義、父曾田恭助（1885年～1963年。1913年、九州大学医学部卒業）や、曾田豊二と大学で同窓だった安藤精彌（1923年～2012年。1948年、九州大学医学部卒業。安藤文英理事長の御尊父）との関係等、委曲を尽くした説明がなされている。のみならず、個人の膨大な蔵書（コレクション）をどのような形で整理・保存し、活用していくべきかについても、地域連携（社会貢献）のあり方を含めて、極めて具体的に示されている。このことはアーカイヴズ学や図書館情報学の実践例としても極めて貴重な試みであり、「ご挨拶」を「曾田豊二文庫の開設にあたって」と改題して、原文のまま九州大学大学文書館のニューズレターに所収させていただく所以である。最後に掲載をご快諾いただいた安藤文英先生をはじめ、曾田豊二文庫、曾田豊二記念財団等、関係各位に謝意を表し、文頭の「解説」に代えたい。

（大学文書館教授 折田悦郎）

### ご挨拶

医療法人西福岡病院理事長の安藤文英でございます。一言、ご挨拶、そして文庫設立の経緯についてご説明いたします。本日、曾田豊二文庫開設にあたりささやかではありますが記念式典の開催をご案内いたしましたところ、お寒い中、連休でお休みの中にもかかわらずご出席いただきまして、まことにありがたく感謝申し上げます。

このお話が出て参りましたのは一昨年の秋であ



曾田豊二文庫開設式テープカット

右より安藤文英理事長、曾田キミヨ氏、白石君男曾田財団理事長

りまして、遅れに遅れを重ね足掛け3年、ようやく完成しましたが、寒い中の開設となってしまいました。奥様にはまことに申し訳ないこととなりました。実は昨日が曾田豊二先生の命日で三回忌です。温かい今日の晴天は恰も曾田先生が微笑んでおられる様で、良い日和となったとほっとしております。

さて曾田豊二先生の足跡につきましては配布させていただきました資料をご参照ください。先生は旧制福岡高等学校から九州帝国大学医学部にすすまれ、ご卒業の後直ちに耳鼻咽喉科学を専攻されております。福岡大学医学部教授、名誉教授、そして日本耳鼻科学会理事長といった大役に就かれ、日本耳鼻咽喉科学会の頂点に上り詰められました。70歳のとき、私の父精彌と英彦山で同郷、また大学医学部入学が昭和19年で同期との誼をもって父の要請をお受けになり私共の医療法人に理事としてご就任、20年以上ご尽力いただきました。当院の診療に随分力をいただきました。その一方で、福岡大学医学部を退任された同僚教授10名ほどを同志としてまとめられ、無料の医療相談所「福岡養生相談室」を開設・運営されております。天神ビルにありました私どものサテライトクリニックの一室で始められ、クリニック閉鎖の後は、かねてから知遇を得ておられた元読売新聞社記者、藤野博史さんのご仲介と、本日ご臨席の読売新聞西部本社代表取締役社長、中井一平様のご協力を得て、読売新聞西部本社ビルに所を変えて

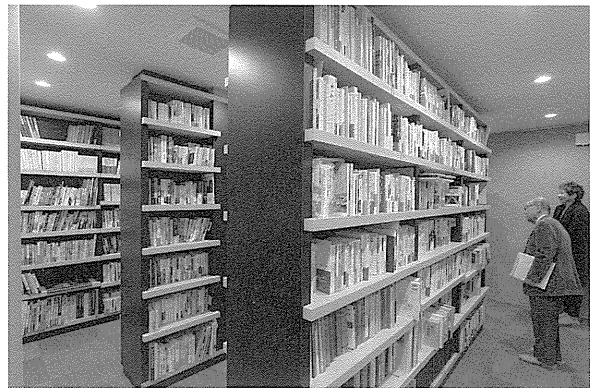
続けられ、約10年にわたります。これは、先生の晩年に至る社会的活動として特筆されるものであります。

私が先生にお目にかかったのは20年以上前であり、したがって約20年間にわたりその警咳に接することとなりました。悠揚迫らぬ態度、融通無碍の思考。懐の深い、とはあのような方を言うのでしょう。領域を異にする内科医師の私には、思想家として映りました。医学部時代の臨床講義は哲学の講義のようだった、と聞いたことがあります。

私事ですが、父が7年前に亡くなった後、理事としてのみならず何かと私を支えていただきました。先生が繰り返し言われたのが、「親父にも色々な書き物や遺品があるだろう。それらを、早いうちに「アーカイブ」としてきちんと残しておくなさい」でした。ご自身の事、その蔵書の行方も意識されていたのではないかと想像しております。

本日お持ち帰りいただくものの中に、曾田豊二先生のお弟子さんたちが取り纏められた追悼集がございます。中に私も記しましたが、ご逝去の2カ月ほど前（平成28年11月）に初めて赤坂のお宅に参上した折、膨大な蔵書の山を目撃することとなりました。「書物無き部屋は魂無き肉体の如し」と言った人がありますが、全部屋、将に汗牛充棟、床も傾く程でしたが、その領域の広さに圧倒されました。耳鼻科学を中心に医学書は勿論ですが、文学、哲学、歴史、小説、評論、自然科学全般、そして漫画、雑誌など世俗的な領域のものも含む多種多様な書物は、先生のあくなき知的好奇心、教養人としての嗜みか、いや教養人であればこそ、その果てしない奥深さを知り、本に求められたのではないかと。将に森羅万象がそこに在る、の感がいたしました。あるいは父上曾田恭助氏がそうであったように、文化的なサロンを再現されようとしたのか、蔵書数は推定3万冊に及びます。

初七日（平成29年1月）に赤坂のご自宅に数人で奥様キミヨ様を訪ねましたが、その席で、このことについて話が及びました際、奥様から「曾田豊二文庫」として保存したい旨お話がございました。これが全ての始まりとなりました。このとき奥様は赤坂の旧宅での保存を考えておられたように思いますが、諸般の事情から実現困難でありました。私自身も、まず難しいだろうな、くらいで、よもや私の病院でお引き受けするなど微塵も思っておりませんでした。一方で、奥様のご意向・ご賛同を受け曾田豊二先生のご遺産を基金と



曾田文庫の内部（読賣新聞社提供）

して、「曾田豊二記念財団」設立の話が定まりつつありました。10カ月ほどの真摯で濃密な話し合いと理事長白石君男先生、理事森園哲二先生や加藤寿彦先生のご配慮のもと、奥様から当法人に対しご寄付をいただけること、そして「曾田豊二記念財団」からのご支援もいただけることとなり、文庫設立を私の法人でお引き受けすることと相成った次第であります。

この役割は大変に名誉なことと受け止めました。これが一昨年の秋ごろでありまして、その頃私としましては保管場所のご提供くらいに比較的气楽にお引き受けしました。しかし、単に蔵書の保管だけではもったいない、社会的に意義のある施設にしようと思いが膨らみ、設立準備委員会を設けて協議することといたしました。なお、ご自宅の処分等により蔵書のみならず家財道具一式の扱いが課題となりましたが、セイワ地研次田和重会長のご好意により現在財団の所在地ともなっております赤坂コートビルのワンフロアをお借りすることが叶いまして、これが時間的な猶予をあたえてくれることと相成りました。

文庫設置については諸条件を鑑み、法人従業員宿舎として借りておりました病院隣接地の民家に白羽の矢を立て、作業に取り掛かることになりました。ここが第一種住宅専用地といった土地利用上の制限がある中、セイワ地研の皆様、森川工務店様などのご尽力を賜り、行政との調整を終え設計図を定め、昨年4月から改装にかかりました。ごく普通の小さな民家に膨大な量の重い書籍を保管するのですから補強も必要で、3カ月程で終わると思われた工事は思いのほか時間がかかり7カ月を要しました。完成後すぐにも仮置き場からの移設搬入をと思いましたが、書籍の状態があまり良いものではありませんで、その改良作業にはさらに時日を要しました。幸い文庫長をお願いし

ておりました田中公人氏による丁寧かつ慎重な作業をもって、よい状態での移設ができませんでした。

なお、曾田豊二先生の父上恭助氏も同じ耳鼻咽喉科の医師でありました。九州帝国大学医学部耳鼻咽喉科学教室の初代教授久保猪之吉氏の直弟子であられたことから、久保先生関連の大量の文書資料もございました。貴重なものも含まれておりましようから、特に、九州大学大学文書館折田悦郎教授のもとで整理、分析が行われることになり、現在ダンボール170箱分が文書館で保管されております。一部は大学文書館で永久保存されることとなりますが、その他の分の取り扱いは今後の検討課題となります。実は、更に200箱以上の書籍がまだ当院の倉庫に保管中であり、文庫での配架は全体の6割ほどに留まっております。容量の見積もりを誤った結果です。

趣旨というほどのものではない文庫設立の趣は以下の通りといたしております。

- 1、久保猪之吉、曾田恭助に連なる曾田豊二の求めた人文的探求の足跡
- 2、旧制高等学校と教養主義の時代体現
- 3、久保猪之吉を始祖とする我が国耳鼻科学の歴史
- 4、養生相談室の事跡
- 5、赤坂の旧宅の変遷
- 6、結核療養所文芸等々

なお3の久保猪之吉につきましてはつい先ごろ柴田浩一先生による渾身の著書『評伝耳鼻咽喉科のパイオニア久保猪之吉』(梓書院、2018年)が上梓されております。お持ちでない方には後ほど贈呈させていただきます。

曾田豊二文庫の標札ですが、その文字には生前曾田先生がご署名された文字をそのまま利用しております。文字を集める「集字」という手法があると大学文書館教授折田悦郎先生に教えていただき、白石先生に遺品の中から探していただいたもので、また旧曾田邸からは蔵書・文書のほか、樹木5本、赤レンガ、門柱2本、庭に配置されておりました石材を持ち運んでおまして、その再利用も行っております。真にささやかではありますが、再構築しておりますのでご覧ください。

さて、いま我国ではこのような個人所蔵書物の保存は困難であって、公共の図書館においても、寄せられる書物の保存要請を断られておられるようです。過去に設立されたいろいろな「文庫」「ライブラリー」もその存続が危ぶまれ、いつの間にか処分されるといった事態が出来、問題視さ

れております。実は、父上恭助氏も大変な蔵書家であり、優に3万冊はあったと聞き及びます。北九州市立図書館で「曾田文庫」として一時保管されていたそうですが、散逸してしまったそうです。このように場所や経費の問題を解決するものとして「デジタルアーカイブ」なるものが考案され、時代はそのような方向に向かっていること、私は、それらのことをよく承知したうえでお引き受けいたしました。それは、大変お世話になりました曾田豊二先生へのせめてものご供養になるのではないかとの思い、また旧制高校出身であられる方々の生きざまに共感する者でありまして、追い求められた教養豊かな人生のその若き折の足跡を辿る縁として、やはり現物をもって展示しなければ真に理解するのは困難であろう、迫りくる圧倒的な質量を感じるだけでも意味のあることであると思うが故であります。

またこの文庫では、あえて図書館や本屋のようにはきちんと区分整理せず、曾田先生が生前身近に置いておられた状態を尊重して配架しております。そうすることが個人を偲ぶのに適当であり、またある本棚の前に佇みますとその周囲にはさまざまな領域の書物が視野に入ってきてきて、すぐに手に取ることができるといった効用があるものと考えます。

ある人が言っております。「本との偶然の出会い。あなたの必要な本は、あなたが見つけた物の横に在る。」と。曾田豊二先生が生涯を通して追い求められた知の旅をここに再現し、来館された方々が疑似体験できればと思います。今後の活動の方向性は、単に陳列しておくだけではなく、ここをプラットフォームとしての活用、例えば企画展示、インターネットを活用して情報発信等々、さまざまに利活用できるのではないかと、究極には何らかの成果物に至れば、との夢も膨らみますが、私どもにはその知恵や力量がありません。皆様方にはどうかご指導、ご援助を賜りたく、お願いを申し上げる次第です。

結びに、この文庫設立にあたり委員として準備にご参画いただきました方々を紹介いたします。森園哲夫、折田悦郎、白石君男、藤野博史、植木とみ子、田中公人各位であります。なお、先ほどの委員会をもって準備委員会は運営委員会として発展解消いたしました。引き続きその運営にご協力をいただきます。有難うございます。以上長くなりましたがご挨拶とさせていただきます。有難うございました。

(医療法人西福岡病院理事長)